

薩摩焼貝目小考

——その存続年代の考古学的検討——

渡 辺 芳 郎

はじめに

南九州の近世陶磁器である薩摩焼には、しばしば「貝目」と呼ばれる二枚貝の痕跡が、製品の口縁部や底部に見られることがある。これらは、製品を重ね焼きする際に製品同士の融着を防止するための緩衝材として、あるいは焼台として、貝を使用した結果と考えられる。

一般に薩摩焼の貝目は、苗代川系陶器の古い段階に見られる技法と認識されている。しかし「古い」と言っても具体的にどの年代を意味するのか、研究者によって意見がやや異なっている。そこで本稿では、薩摩焼における貝目を持つ考古資料を抽出し、その暦年代を共伴資料などを参考にしながら推定し、貝目の存続年代について、一考を試みたい。

1 貝目技法について

まず本稿では、製品の口縁部や底部に見られる貝の痕跡を「貝目」、貝を用いて重ね焼きをしたり、貝を焼台として用いる技法をまとめて「貝目技法」と呼んでおきたい¹⁾。

貝目技法に用いられる貝の種類は、『薩摩焼の研究』（田沢・小山 1941 以下『研究』と略称）においてハマグリ・ハイガイ・サルボウが挙げられている。また山元窯跡では、扁平なイタヤガイが用いられていることが報告されており（関編 1995 p. 108）、このほか種子島の能野焼ではトコブシを用いるとされて

いる（向田 1978 p.143）²⁾。

貝目が残る部位としては、おもに甕や壺、鉢・播鉢など、いわゆる「薩摩黒物」の口縁部・外底底部・内底底部・胴部などである。

口縁部の貝目は、窯詰の際、製品の口同士を重ねる「合わせ口」の痕跡と考えられ（図1-1）、関一之は、それが「匣鉢」としての機能をも併せ持っていた可能性を指摘している（関編 1995 p.108）。

それに対して底部の貝目はふたつの場合が考えられる。ひとつは、焼台の上あるいは窯床面に直接貝を置き、その上に製品を正置した場合である（図1-3）。もうひとつは、播鉢や甕などの内底底部にも貝目が見られることから、図1-2のような正置による重ね焼きの場合である。また先述したように、合わせ口で匣鉢として用い、なおかつ内部の製品底部に貝を置いた場合にも、内底に貝目が残ることがあるであろう（図1-1）。なお播鉢の内底底部の貝目は、その後の使用により摩滅し、残ってない場合も想定される。

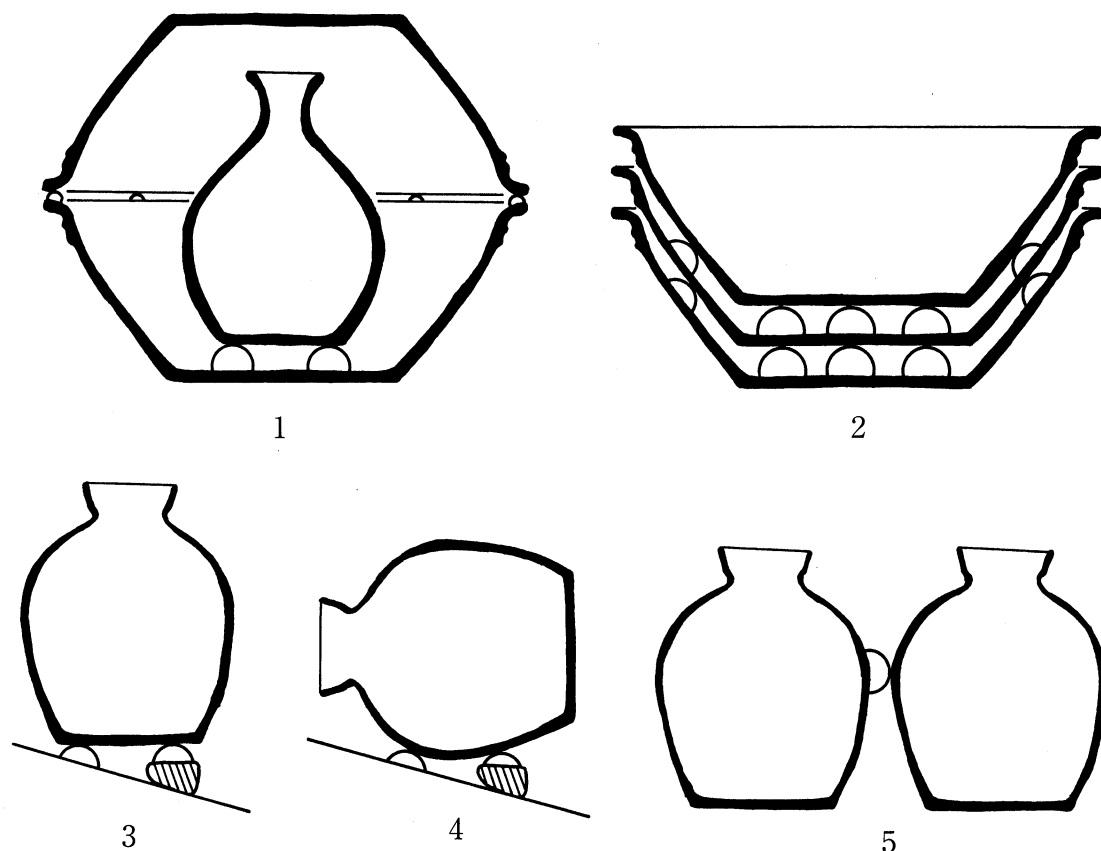


図1 貝目技法想定模式図

胴部に貝目が残る例は、いくつかの置き方が想定できる。ひとつは前述の、播鉢などを重ね焼きする際に、製品胴部に補強として差し込む場合（図1-2）、ふたつめは甕や徳利などを横置するときに焼台として用いる場合（図1-4）、三つめは窯内部で製品同士が接触することを避ける場合である（図1-5）。

以上の貝目技法は、製品に残る貝目を手がかりとして想定したものであり、窯跡からの融着資料などで検証していく必要がある。

ところで、貝目には、貝殻の「背」の部分が残っている場合と、「縁」の部分が残っている場合とがある。「縁」を下にした方が安定性があり、前述したような合わせ口の重ね焼きなどの場合には、「縁」の目跡が残るものが下、「背」の痕跡が残るものが上と判断できないこともない。ただし、焼台に「背」の部分が残る例もあり、その場合は、「背」が下、「縁」が上に置かれたことになる。また外底底部に、「背」と「縁」の貝目が共存する場合もある。一方、山元窯のように扁平なイタヤガイの場合は、上下を区別して使い分ける必要はないであろう。貝の置き方に一定の規則性があったのかどうかは、類例を蓄積することで検証されよう。

2 貝目技法の年代観—研究史—

薩摩焼における貝目への注目は、『研究』において見られる。該書では、串木野窯・元屋敷窯・堂平窯において貝目は見られるが、寛文9年(1669)に開窯したと推定される五本松窯以降の窯では貝目は見られないとしている（p. 181）。また堂平窯跡出土の「黒物手」には、貝目を持つ「第一類」と、貝目を持たない「第二類」とがあり、さらに堂平窯は、「朝鮮系単室傾斜窯」である「堂平古窯」と、「肥前系連房式登窯」である「堂平新窯」の新古2種があったとし、堂平古窯から新窯への転換を、五本松窯開窯とほぼ同時期と推定している（pp. 175-179）。『研究』では「黒物手第一類」「第二類」と「堂平古窯」「新窯」との関係については明示していないが、第二類は五本松窯製品に類似していること、五本松窯と堂平新窯の開窯に、豎野窯の陶工・星山嘉入（1649-1721）が関係

していると想定していることなどから、「黒物手第一類」=「堂平古窯」,「第二類」=「堂平新窯」と考えていたと推測される。そうすると、貝目技法は、五本松・堂平新窯開窯時、つまり1660年代末~70年代において姿を消したと理解していたと推定されよう。

しかしその一方、宝永元年(1704)に苗代川から陶工が移住して開窯したとされる鹿屋市笠野原窯跡でも、貝目をともなう陶片が採集されている(『研究』pp. 197-198)。このことは、18世紀初頭の笠野原窯⁴⁾において貝目技法が用いられていたことを意味するだけでなく、その時期まで苗代川系の窯場においても貝目技法が存続していたことを示唆する。田沢・小山らは、製品の共通性などから、笠野原窯と堂平窯との関係が密接であったと推測しているが(p. 198)、彼らの窯の操業年代観によれば、この年代の「堂平窯」は「堂平新窯」の時期にあたる。「黒物手第二類」=「堂平新窯」と理解するならば、苗代川の貝目技法と笠野原のそれとの間に年代的齟齬が生じることになる。先述したように、『研究』では堂平窯の2種類の黒物手と古窯・新窯との関係を明示していないため、田沢・小山らの貝目技法の年代観については、あいまいな部分が残っているといえよう⁴⁾。

ついで佐藤進三が調査した加治木町御里窯跡においても、貝目を持つ甕片が出土しており、苗代川系以外の窯場でも貝目技法が用いられていたことがわかる(1943 p. 24)。このことはまた、貝目技法が、薩摩に渡来した朝鮮陶工にある程度共通した技法であったことを示唆していよう⁵⁾。

向田民夫は、貝目技法は享保年間(1716-1735)の初期まで盛んに使用されたと考えているが、その論拠は明示していない。また種子島の能野焼における貝目使用について、新野稔明の見解を紹介し、享保11年(1726)銘の四耳壺に貝目が見られるといい、「寛政(1800)以後まで存在したといわれている」としている(1978 pp. 142-143)。

また山口丹海(1979)は、「島平窯」(串木野窯のこと)の「貝高台」について触れた部分で、「二枚貝特に赤貝の殻を四枚揃えて並べ、その上に焼物を置く古い形式で、江戸中期まで使われた」(p. 158)としている。「江戸中期」と

は18世紀を指すかとも思われるが、ややあいまいであり、またその根拠については書中に探し得なかった。

一方、野元賢一郎（1982・1985）は、『研究』の成果に基づきつつ、堂平窯の開窯年代を慶安2年（1649）頃とし、「次の新堂平窯に移るまでの元屋敷、堂平時代は貝殻による貝目を底足、器物間の融着防止に使い、以後は短冊形のコマや団子の土目を使っている」（1985 p. 19）としている。氏の窯の操業年代観によれば、五本松窯については、『研究』と同様、寛文9年（1669）開窯とし、また新堂平窯は堂平窯閉窯後の寛文12年（1672）頃の開窯としている。つまり苗代川における貝目技法は1660～70年代までと認識されているようである。実際、氏が全体的な監修を行った『さつまやき—その歴史と多様性—』展図録（鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1985）では、貝目を持つ資料は、19世紀とされた1例をのぞき、すべて17世紀に比定されている。ただし同氏の編んだ「薩摩焼年表」（1984）では、笠野原窯における貝目の存在を示しており、先に指摘した『研究』と同様の問題を含んでいる。

また出口浩は、前述の向田民夫の年代観に触れつつも、唐津焼において貝目が17世紀初頭の技法であることを傍証としたうえで、貝目を持つ甕・鉢・播鉢を17世紀前半代に比定している（出口・濱川編 1992 p. 46）。

その後、加治木町山元窯跡が発掘され、イタヤガイの貝目を持つ播鉢などが出土している。山元窯の操業年代については異説はあるものの、ほぼ1660～70年代頃と考えられており、17世紀中葉～後葉において貝目技法が使用されていたことがうかがわれる（関編 1995）。また報告者は、山元窯の系譜を引き、従来貝目技法のないとされていた龍門司焼についても、その有無を確認するよう注意を喚起している（p. 113）。

下山覚は、貝目技法が18世紀以後も「古器の技術伝承」として微量ながら用いられていた可能性を考慮に入れつつ、日常雑器については17世紀代という年代観を示している（下山編 1996 p. 24）。

1998年鹿児島県歴史資料センター黎明館において、「薩摩焼発祥400周年記念展」として『世界のさつま』展が開催された。同展図録（鹿児島県歴史資料セ

ンター黎明館編 1998) 中の野元賢一郎の論考(1998)では、それまでの見解がほぼ踏襲されているが、その一方、山下廣幸らによって編集された図録中において、1985年の図録で17世紀に比定されていた貝目資料が18世紀前半に引き下げられている点は注目されよう。ただし伝世品の場合、日常的に使用・消費される日用品と異なり、下山が指摘するような「古器の技術伝承」あるいは古い技法の一時的採用という可能性も考えられ、一般的な貝目技法の存続年代を反映しているかどうか、慎重な判断が必要であろう。

以上見てくると、貝目技法の年代については、17世紀の特徴と考える見解と、18世紀まで下るとする見解が示されているといえよう。では考古資料においてはどうか、以下、大龍遺跡の資料を中心に検討を加えたい。

3 大龍遺跡出土の貝目資料とその年代

近年、近世考古学、とくに近世陶磁器の考古学的研究の進展は著しいものがあるが、薩摩焼に関しても、従来の美術史的・文献史的研究だけでなく、考古学的関心が高まりつつある。それは、阿久根市脇本窯跡(阿久根市誌編さん委員会編 1974 pp. 996-1001)・鹿児島市堅野冷水窯跡(戸崎他編 1978)の発掘調査を嚆矢として、加治木町山元窯跡(関編 1995)・御里窯跡(1995年)・弥勒窯跡(1997年)、始良町元立院窯跡(下鶴編 1995)、東市来町堂平窯跡(1998年)の発掘調査や、川内市平佐焼窯跡の分布調査・発掘調査(1999年)などに現れている。一方、鹿児島(鶴丸)城本丸・二之丸跡(戸崎・吉永編 1983, 出口編 1984, 諏訪・弥栄編 1991, 弥栄編 1992)や、鹿児島城下町の発掘(出口編 1992, 出口・濱川編 1992a・b など)なども実施されており、消費地における発掘資料の蓄積も進められている。

そのうち大龍寺跡である鹿児島市大龍遺跡では、近世から近代にかけての土坑群が多数検出されており(本田・下山編 1986, 出口編 1992)、各土坑からは、薩摩焼とともに、肥前磁器、京焼などの他地域の製品が共伴して出土している。薩摩焼の編年は、現在構築途上にあり⁶⁾、そのためには、薩摩焼そのものの型

式学的研究とともに、他地域の編年を参考にして、それらと共伴する薩摩焼の年代を推定していくことが必要である。それゆえ、この大龍遺跡の資料が、薩摩焼の年代推定に果たす役割はきわめて大きいものであることを強調しておきたい。また今後、このような土坑一括資料の増加が望まれる。

そこでまず、大龍遺跡第7次調査（出口編 1992）の資料のうち、貝目をもつ薩摩焼を出土する土坑を抽出する⁷⁾。そしてそれら出土した土坑の共伴遺物について、肥前や江戸、京焼などの編年案を参考にしながら⁸⁾、土坑の年代について推定を試みたい。そのうえで、貝目の存続年代について私見を述べたい。

大龍遺跡第7次調査において、貝目を持つ製品を出土した土坑には、以下のものがある。

土坑 No. 25（図2）⁹⁾

外底底部に貝目を持つ播鉢（4）が出土している。そのほかせんじ碗に近い形態の色絵碗（1）が供伴しており、京焼におけるせんじ碗は1720～60年代に位置づけられている（鈴木 1999 p. 41）。肥前の京焼風陶器においても、せんじ碗は18世紀前半の窯から出土している（大橋 1989 p. 15）。また現川焼の碗（3）も出土し、現川焼が18世紀前半に操業された窯であることから、この土坑の年代は18世紀前半以降と推定される。

土坑 No. 71（図3）

外底底部に貝目を持つ植木鉢（20）が出土している¹⁰⁾。18世紀前半の現川焼の碗（12）とともに、18世紀後半から19世紀初頭とされる筒形湯飲み茶碗（4）（西田・大橋 1988 p. 146）、18世紀後半から流行する菊花文（西田・大橋 1988 p. 56）を描いた高坏（6）、18世紀後半と思われる渦福（鈴田 1995 p. 273）を高台内に描く碗（2）などの磁器が共伴する。そのほか乳白色釉に見込み蛇の目釉剥ぎをした龍門司系の鉄絵鉢（16）、元立院系と思われるどんこ釉の花瓶（18）や三島手の碗（17）などが共伴する。

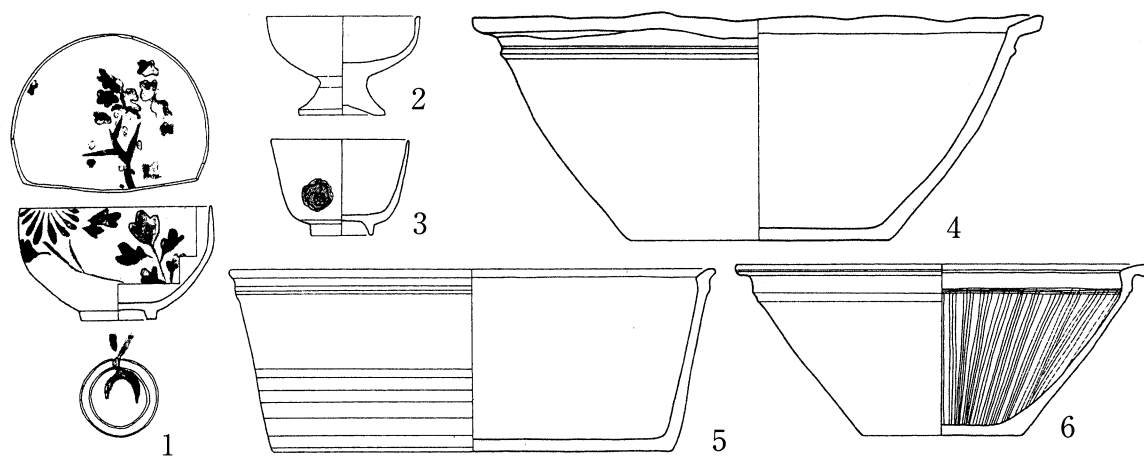


図2 大龍遺跡・土坑 No. 25 出土遺物 (S=1/6)

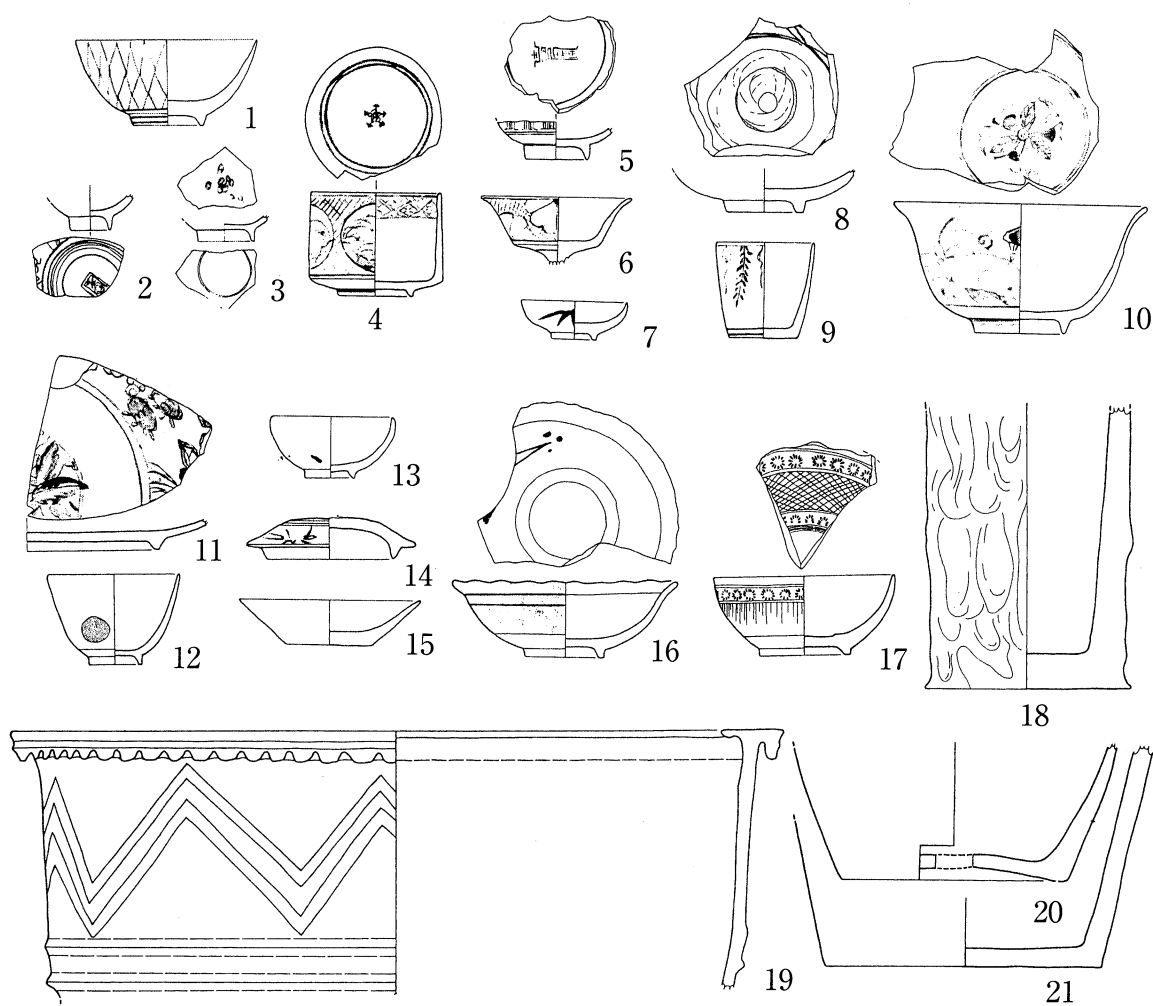


図3 大龍遺跡・土坑 No. 71 出土遺物 (S=1/6)

土坑 No. 84 (図 5)

口縁部に貝目を持つ播鉢 (7) が出土している。そのほか色絵の平碗 (3), 五弁花と渦福を描く染付碗 (2), 灯明受け皿 (4・5) などがある。色絵の平碗

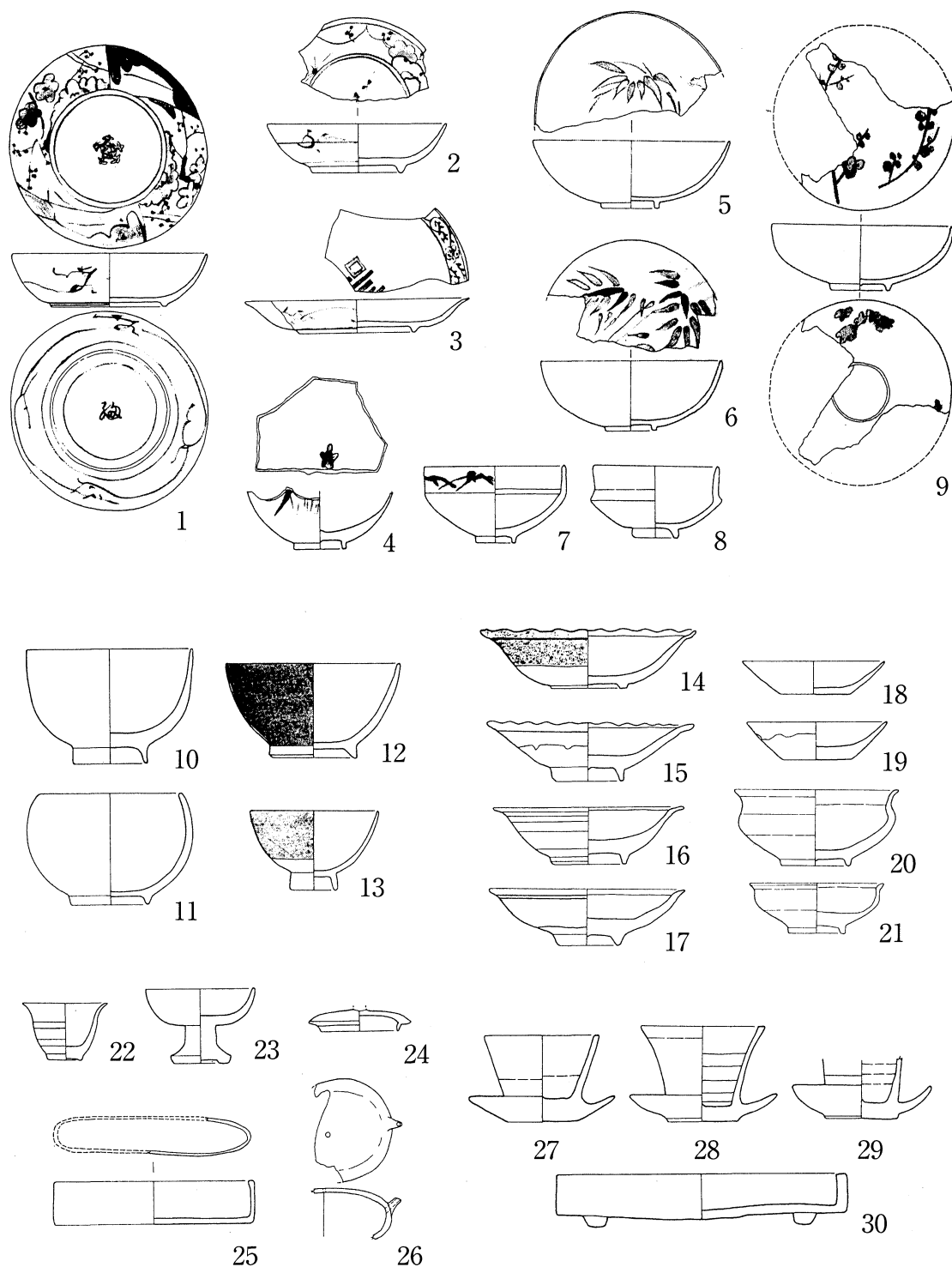


図 4 大龍遺跡・土坑 No. 94 出土遺物 (S=1/6)

は京焼などでは17世紀後半から18世紀初頭に見られるという（鈴木 1999 pp. 40-41）。渦福文は肥前において18世紀において流行する。灯明受け皿は、瀬戸美濃地方では17世紀後葉から生産が始まるようであり（瀬戸市史編纂委員会編 1998 p. 270, 273, 414-417）、また形態がやや異なるものの、江戸遺跡では17世紀後葉から出現し、18世紀以降普及するという（長佐古 1993, 堀内 1996）。瀬戸美濃や江戸の資料をそのまま鹿児島に当てはめることは慎重であるべきであるが、1660～70年代とされる山元窯跡において灯明受け皿が出土していないことは、逆に、その出現が山元窯以後であることを暗示している。以上より、本土坑の年代は17世紀後葉以降、おそらく18世紀代と推定される。

土坑 No. 94（図4）

外底底部に貝目を持つ盤（30）が出土している。見込みに五弁花を、高台内に渦福を記した染付皿（1）、色絵の平碗（5・6・9）、鉄絵のせんじ碗（7・8）などが共伴する。薩摩焼としては白薩摩の碗（10・11）・水滴（26）・鬘水入（25）、白濁釉を掛け、内底を蛇の目釉剥ぎした碗（12・13）・皿（14～17）、灯明受け皿（27～29）などが出土している。鬘水入（鬘盥）は、瀬戸美濃地方では第2段階（17世紀後葉から18世紀中葉）を中心に生産されており（瀬戸市史編纂委員会編 1998 p. 273, 418）、また江戸遺跡で1680年代から見られるという（堀内 1996 p. 11, 23）。せんじ碗を手がかりとするならば、本土坑は18世紀前半以降と考えられる。

土坑 No. 96（図6）

外底底部に貝目を持つ鉢（1）が出土している。黒釉をかけた御器手に近い大振りの碗（2）が共伴している。御器手の碗は、江戸遺跡において17世紀に見られるという（長佐古 1996 pp. 70-71）。

土坑 No. 166（図7）

口縁部に貝目を持つ甕（1）が出土している。三羽の千鳥印をもつ白薩摩の

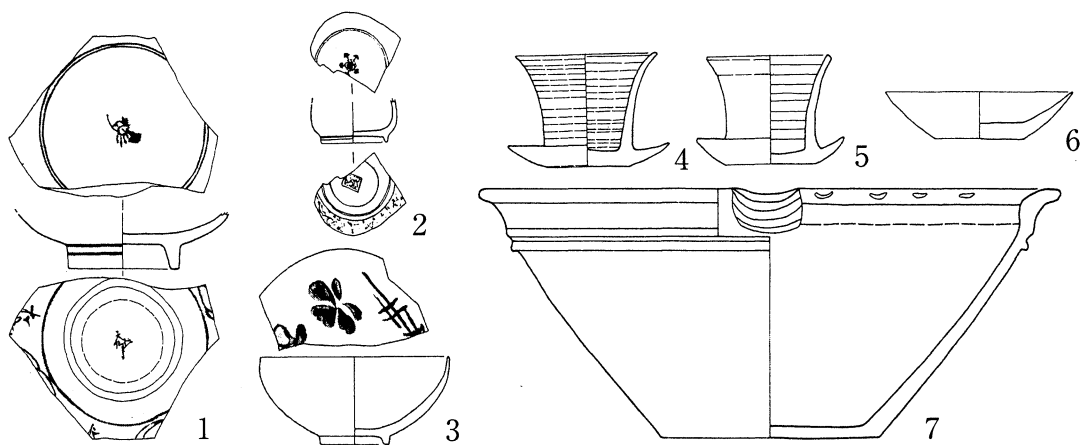


図5 大龍遺跡・土坑 No. 84 出土遺物 (S=1/6)

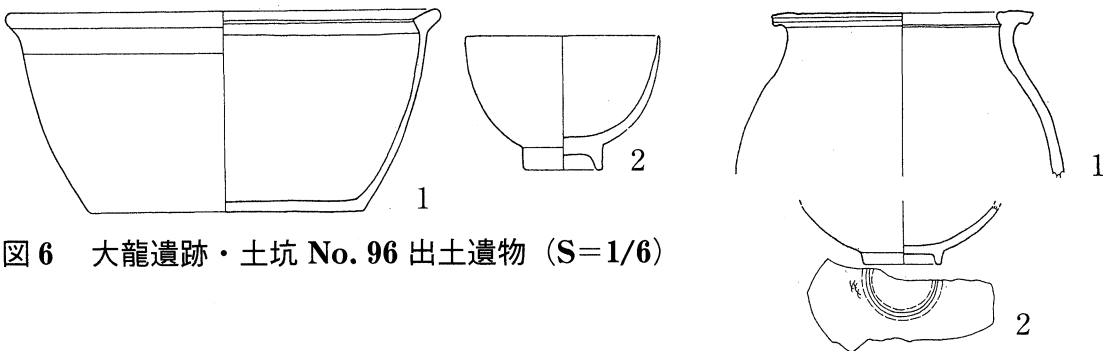


図6 大龍遺跡・土坑 No. 96 出土遺物 (S=1/6)

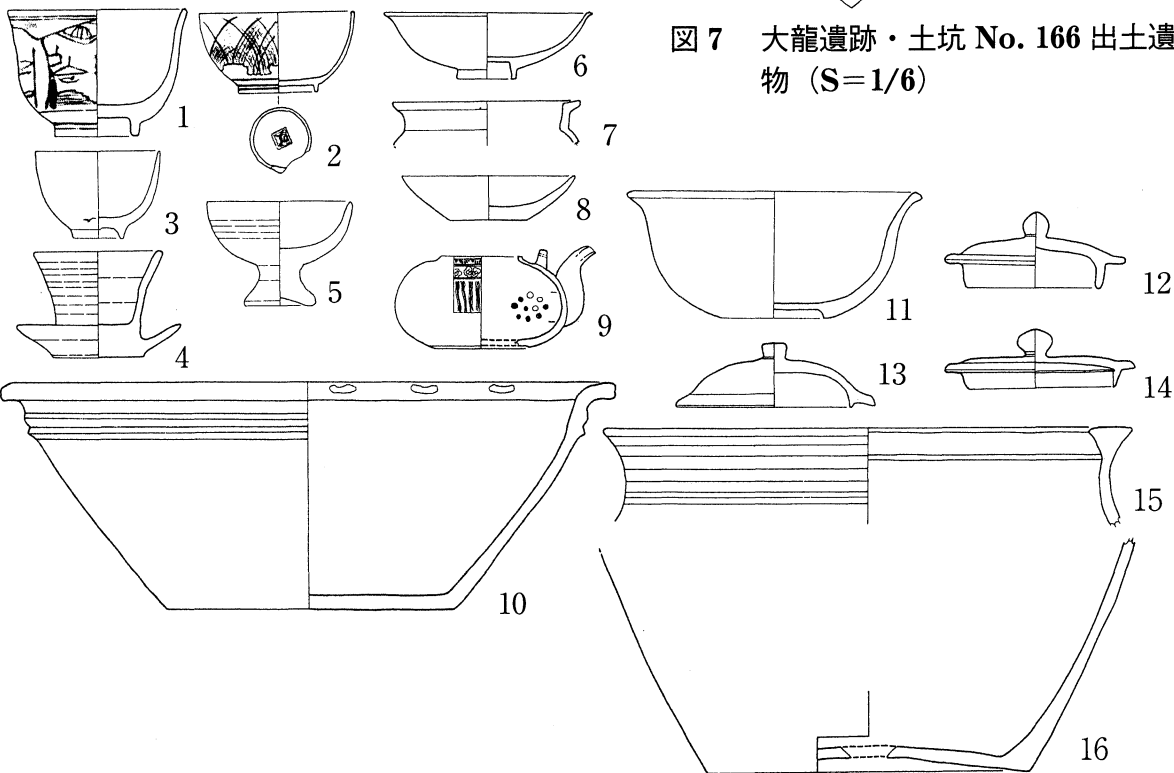


図7 大龍遺跡・土坑 No. 166 出土遺物 (S=1/6)

図8 大龍遺跡・土坑 No. 201 出土遺物 (S=1/6)

碗(2)が共伴する。千鳥印は、承応2年(1653)に販売を許された白薩摩に描かれたと伝えられている(野元 1985 p. 13)。仮にこの伝承に信を置くならば、17世紀後半以降の年代が与えられよう。

土坑 No. 201 (図8)

口縁部に貝目を持つ播鉢(10)と甕(15)が出土している。共伴する資料として、底部に渦福をもつ染付碗(2)、陶胎の染付碗(1)などがある。前者は、18世紀代の肥前染付碗に類例があり(佐賀県立九州陶磁文化館 1984 p. 101)、また後者のような山水文を描く陶胎染付は、佐世保市江永A窯などで18世紀に焼成されている(久村編 1975)。江戸遺跡においても陶胎染付の碗は17世紀末から18世紀に流行するようである(長佐古 1996 p. 73)。18世紀前半代の現川焼の皿(6)も共伴し、このほか薩摩焼としては、灯明受け皿(4)、千鳥印を描く白薩摩碗(3)、三島手の茶家(9)などがある。

以上、大龍遺跡の土坑出土の貝目資料をピックアップしたが、共伴資料からすると、17世紀後半代から18世紀代に位置づけられるものが多く、一部には19世紀まで下る可能性を持つ資料と共伴する例もある。これらの貝目資料の中には「古器の技術伝承」「古い技術の一時的採用」を含む可能性もあるが、その一方で播鉢や甕などの日用品も出土しており、日用品生産における一般的な窯詰方法として貝目技法が18世紀以降においても存在していた可能性を示唆しているといえよう。

もちろん大龍遺跡の土坑の年代は、あくまで「廃棄年代」であり、必ずしも「生産年代」を直接示すものではない。それゆえ、18世紀代に「貝目」が見られることは、18世紀代に「貝目技法」が存在していたことの決定的証拠にはならない。「生産年代」と「廃棄年代」との間に時間差—使用期間—があることは十分想定できることであるが、生産年代を知るためには、あるいは時間差をどの程度盛り込むかは、生産地遺跡の発掘調査を待たねばならず、18・19世紀の苗代川窯跡の発掘例のない現段階では、不可能である。

しかし、前章で指摘したように、1704年以降の開窯とされる笠野原窯跡で貝目資料が採集されていることを考えあわせれば、朝鮮陶工の渡来とともに始まった「貝目技法」が、少なくとも18世紀初頭ないしは前半代までは存続していたと推測することも十分可能であろう。ただし、その生産年代の下限については、「廃棄年代」という資料の性格上、現段階では確定的なことは言えず、今後の資料の増加を待ちたい。

おわりに

薩摩焼の考古学的研究は、『薩摩焼の研究』においてその緒がつけられたが、その後は、おもに美術史的・文献史的研究が中心であり、考古学的研究が長いこと停滞していたことは否めない。近年、その傾向は大きく変わりつつあるが、半世紀以上前に刊行された研究成果が無批判に利用されたり、ときにその説が一人歩きする場合がないわけではない。それゆえ本稿では、貝目の年代観に限ってはいるが、意図的に研究史に紙幅をさくことで、さまざまな説の論拠と由来を跡づけようと試みた。

また本稿で示した貝目の年代観に対しては、反論もありうるであろうし、また今後の研究によって否定されることもあるであろう。しかし、学問とは仮説の提示とそれに対する相互批判を通じて発展していくものであり、本稿が薩摩焼の考古学的研究の新しい展開のためのたたき台になれば幸いである。

1999年9月28日 稿了

謝 辞

成稿にあたっては、多くの諸機関・諸氏より資料の提供ならびに有益なご教示・ご助言をいただきました。文末にご芳名を記して、感謝の意を表します。

池畑耕一・牛ノ濱修・大西智和・大橋康二・鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島市ふるさと考古歴史館・鹿児

島大学埋蔵文化財調査室・上村俊雄・下鶴弘・下山覚・新里貴之・鈴木裕子・
鈴田由紀夫・関一之・出口浩・戸崎勝洋・中村直子・新田栄治・深港恭子・古
澤生・本田道輝・松村真希子・山下廣幸 (五十音順・敬称略)

<注>

- 1) 「胎土目積み」「砂目積み」と同様、「貝目積み技法」という名称も考えたが、本文中でも述べるように、必ずしも重ね焼きだけに用いられる技法ではないと想定されるので、やや落ち着きが悪いが「貝目技法」と呼んでおきたい。より適切な名称があれば変更することもありうる。
- 2) 関一之氏によれば、鹿児島本土出土の貝目資料の中にも同様のものが散見されるという。
- 3) 『研究』においても触れられているように、笠野原窯の開窯年代については異説がある (pp. 195-196)。天保14年 (1843) に編纂された『三国名勝図会』の「笠野原」の項には、「寛政年中 (1789-1800—渡辺注) より始めて陶器を造ることをなせり」 (原口監修 1982 第4巻 p. 53) とあり、宝永元年 (1704) の移住ののち、約90年を経て開窯したとしているが、『研究』ではこの説を否定し、移住直後に開窯したとしている。また前田幾千代は、苗代川からの陶工のほかに、寛政年間に笠野原から陶工が来て焼成したとしている (前田 1941 pp. 74-75)。筆者はいずれの説が正しいかを判断する資料を持っていないが、少なくとも、本窯跡で採集された貝目資料の上限年代を宝永元年とすることはできよう。
- 4) 堂平窯跡は、1998年鹿児島県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。苗代川系窯跡としてははじめての本格的調査であり、17世紀の薩摩焼の様相を知る上できわめて貴重な資料である。また本稿で指摘した貝目の下限をめぐる問題も解決される可能性もあろう。報告の刊行が待たれる。
- 5) ただし御里窯跡からは、他窯の製品も多数出土しており、「稲代川」 (苗代川) 製品とされるものも30余片あるという。それゆえ出土した貝目資料が苗代川からの搬入である可能性は否定できないが、佐藤は、貝目を持つ甕が、宇都窯製品と同一手法であることから、御里窯製品と判断している (1943 p. 24)。ここでは佐藤に従う。
- 6) 考古学資料にもとづく薩摩焼の編年については、出口浩が提示した編年案 (出口・濱川 1992b) が管見に触れる限り唯一のものである。また下山覚は紀年銘資料の伝世品を中心に扱いながらも、考古学的視点から徳利についての分類と編年を試みている (下山 1997)。
- 7) 大龍遺跡は、計8次の発掘調査が実施され、うち第5・6・7次調査において近世

土坑が報告されている（本田・下山編1986，出口編1992）。ただし第5次調査の土坑資料については，報告者自身が述べているように，若干の混乱がある可能性があり，ここでは慎重を期して，検討資料としては採用していない。また第6次調査では貝目資料が出土する土坑は報告されていない。

- 8) 肥前磁器・京焼・江戸遺跡出土資料の年代比定については，本文中で触れたものも含めて，江戸陶磁土器研究グループ編 1992・1996，大橋 1989，小林 1992・1996，佐賀県立九州陶磁文化館編 1984・1990・1991・1993・1995・1997・1998，鈴木 1999，鈴田 1995，長佐古 1992・1993・1996，堀内 1996，西田・大橋監修 1988，両角 1996などを参照した。もちろん本稿での比定年代の可否については渡辺が責任を負うものであることは言うまでもない。
- 9) 報告書の土坑一覧表では空欄になっているが（出口編 1992 p. 89），報告者・出口浩氏より，25号土坑であるとのことご教示を得た。
- 10) 報告書には貝目の報告はないが，筆者が鹿児島市ふるさと考古歴史館にて実見した際，当該の植木鉢底部に貝目が残っていることを確認した。

<参考文献>

- 阿久根市誌編さん委員会編 1974 『阿久根市誌』阿久根市 阿久根
- 江戸陶磁土器研究グループ編 1992 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ 発表要旨』江戸陶磁土器研究グループ 東京
- 江戸陶磁土器研究グループ編 1996 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ 発表要旨・資料集』江戸陶磁土器研究グループ 東京
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニューサイエンス社 東京
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1985 『さつまやき—その歴史と多様性—』展図録 鹿児島県歴史資料センター黎明館 鹿児島
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1998 『世界のさつま』展図録 鹿児島県歴史資料センター黎明館 鹿児島
- 小林謙一 1992 「皿形土器類」江戸陶磁土器研究グループ編 1992 pp. 106-131
- 小林謙一 1996 「江戸在地系土器と江戸出土土師質塩壺類の編年（要旨）」江戸陶磁土器研究グループ編 1996 pp. 99-113
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 1984 『国内出土の肥前陶磁』展図録 佐賀県立九州陶磁文化館 有田
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 1990 『柴田コレクション展（Ⅰ）』図録 佐賀県立九州陶磁文化館 有田
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 1991 『柴田コレクション展（Ⅱ）』図録 佐賀県立九州陶磁

文化館 有田

佐賀県立九州陶磁文化館編 1993 『柴田コレクション展 (Ⅲ)』図録 佐賀県立九州陶磁

文化館 有田

佐賀県立九州陶磁文化館編 1995 『柴田コレクション展 (Ⅳ)』図録 佐賀県立九州陶磁

文化館 有田

佐賀県立九州陶磁文化館編 1997 『柴田コレクション展 (Ⅴ)』図録 佐賀県立九州陶磁

文化館 有田

佐賀県立九州陶磁文化館編 1998 『柴田コレクション展 (Ⅵ)』図録 佐賀県立九州陶磁

文化館 有田

佐藤進三 1943 「古薩摩お里窯発掘に就て」『陶磁』14-1 pp. 1-32

下山覚 1997 「薩摩焼徳利の分類」『人類史研究』9号 pp. 159-170

下山覚編 1996 『暮らしの中の薩摩焼』展図録 指宿市教育委員会・国際ソロプチミスト指宿 指宿

鈴木裕子 1999 「京焼出土資料の変遷」『'99徳島城下町研究会 京焼—消費地出土の様相—(発表要旨)』pp. 35-56 関西近世考古学研究会・考古フォーラム徳島 徳島

鈴田由紀夫 1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」佐賀県立九州陶磁文化館編 1995 pp. 272-279

諏訪昭千代・弥栄久志編 1991 『鹿児島城二之丸跡 (遺構編)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(55) 鹿児島県教育委員会 鹿児島

関一之編 1995 『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書 1 加治木町教育委員会 加治木

瀬戸市史編纂委員会編 1998 『瀬戸市史 陶磁史編 六』瀬戸市 瀬戸

田沢金吾・小山富士夫 1941 『薩摩焼の研究』座右宝刊行会 東京 (1987年 国書刊行会復刻 東京)

出口浩編 1992 『大龍遺跡 第1集 歴史時代編 大龍寺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 鹿児島市教育委員会 鹿児島

出口浩・濱川まゆみ編 1992a 『造士館・演武館跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 鹿児島市教育委員会 鹿児島

出口浩・濱川まゆみ編 1992b 『福昌寺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 鹿児島市教育委員会 鹿児島

戸崎勝洋・吉永正史編 1983 『鹿児島 (鶴丸) 城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26) 鹿児島県教育委員会 鹿児島

戸崎勝洋他編 1978 『豎野 (冷水) 窯址』社団法人鹿児島共済南風病院 鹿児島

長佐古真也 1992 「陶器碗類の分類」江戸陶磁土器研究グループ編1992 pp. 29-38

長佐古真也 1993 「『受付き灯明皿』にみる生産と流通」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XII pp. 41-71

- 長佐古真也 1996 「“江戸” 遺跡に流通する量産陶器碗の編年 (Ver. 2.1)」江戸陶磁土器研究グループ編 1996 pp. 69-84
- 西田宏子・大橋康二監修 1988 『別冊太陽63 古伊万里』平凡社 東京
- 野元賢一郎 1982 「薩摩」『日本やきもの集成12 九州Ⅱ 沖縄』平凡社 pp. 123-131 東京
- 野元賢一郎 1984 『薩摩焼年表』鹿児島県歴史資料センター黎明館 鹿児島
- 野元賢一郎 1985 「薩摩焼の歴史と多様性」鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1985 pp. 10-24
- 野元賢一郎 1998 「薩摩焼技術史補遺」鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1998 pp. 22-30
- 原口虎雄監修 1982 『三国名勝図会』全5巻 新潮社 熊本
- 久村貞雄編 1975 『江永古窯』佐世保市教育委員会 佐世保
- 堀内秀樹 1996 「東京大学北郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」江戸陶磁土器研究グループ編 1996 pp. 5-46
- 本田道輝・下山覚編 1986 『鹿大考古』第4号 (大龍遺跡第5・6次調査報告) 鹿児島大学法文学部考古学研究室 鹿児島
- 前田幾千代 1941 「薩摩焼異聞 (四)」『茶わん』130 pp. 67-77
- 弥栄久志編 1992 『鹿児島城二之丸跡 (遺物編)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (60) 鹿児島県教育委員会 鹿児島
- 向田民夫 1978 『日本の陶磁9 薩摩』保育社 東京
- 両角まり 1996 「瓦質土師質土器類の分類について」江戸陶磁土器研究グループ編 1996 pp. 85-98
- 山口丹海 1979 『生活の中の薩摩焼』山口和子 加治木

補遺

脱稿後、貝目をともなう甕の口縁部が、金峰町上水流遺跡の集石遺溝から出土していることを知った。共伴遺物として、17世紀末から18世紀初頭とされる佐賀県内野山北窯産の丸腕が出土している。本稿の論旨と矛盾しないものであるが、少ない一括資料のひとつとして挙げておく。

- 宮下貴浩編 1998 『上水流遺跡 第1次調査』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9) 金峰町教育委員会 金峰町